

## 高次脳機能障害を知っていますか？

NPO法人 日本脳外傷友の会 東川悦子

脳の時代と言われるように脳が注目されていますね。

養老孟司先生、川島隆太先生、茂木健一郎先生などなど、いわゆる脳科学者の先生方がマスコミで大活躍です。心はどこにあるか？脳死って？つまり人間の生き死にのすべての鍵を握るのも脳、精神とか、魂とか心とか呼ばれている人間活動のすべてをコントロールするのも脳なのということですね。

昔から、私たちはどんなに兄弟げんかなどしても「頭は叩いてはいけない！」ときつくしつけられてきました。頭は神様がいらっしゃるから「いい子、いい子」となでられてきました。その頭が中身がぐちゃぐちゃになるくらい壊れてしまったらとんでもないことになることは想像できますよね。でも、今までは、それが注目されていなかったのです。

交通事故で脳挫傷とか、転落事故で脳挫滅とか、脳血管障害で脳梗塞、脳出血、あるいは脳腫瘍で脳の一部を切り取ったとか、溺れて低酸素脳症になったとか、さまざまな原因で起こる脳の機能低下それが高次脳機能障害です。

ですから、やられた脳の場所によってそのあらわれ方が異なってきます。右の脳をやられると、左側が麻痺して、言葉も出にくくなる失語症になるとか、前頭葉と呼ばれる大脳の前の方をやられると、感情のコントロールができにくくなって、怒りっぽくなる、後頭葉をやられると物の形などを理解しにくくなる失認という症状が出るとかです。

しかも厄介なことに、脳の中身は外観からは見えませんから、手足に何も異常な症状がなく、一見して全くの健全な若者に見える人が実は交通事故で脳をやられて、重大な後遺症を抱えている人であるわけです。

私の息子も15年前に交通事故に遭い手足は何も傷つかずでしたが、頭を強打して意識不明50日も経ってよみがえりました。事故の知らせを聞いて駆けつけた時には、間もなく死ぬか、助かっても植物状態はまぬかれないとDrに、言われました。

ところが、奇跡的に命も助かり、その後のリハビリの効果もあって、車いす生活でもなく、杖も使わず、一見して「どこに障害があるの？」と言われるほどに回復しました。

しかし、一緒に暮らしていた親には、わかるのですねえ。以前のように記憶ができない。お洒落だったのが、身づくろいがおかしい、計画性がない等等。

もちろん、本人が以前できたことができなくなっていることに気が付き一番つらい思いをしているに違いありません。中には本人も気がつかず、家族もわからないで、ストレスばかりが溜まり、親子関係や夫婦関係がズタズタになってしまう方もいます。

おまけに日本の福祉制度は、このように表面からわかりづらい障害者が利用しやすい制度になっていません。制度の谷間に落ちている障害問題として、私たちの運動は、今後の福祉、社会保障のあり方を変える重大な問題提起をはらんでいるのです。

1997年、私たちは「脳外傷友の会・ナナ」を結成しました。「ナナ」とは神奈川県リハビリテーションセンターのある厚木市の七沢からとった命名です。

そして翌年、横浜で、我が国初めての「脳外傷シンポジウム」を開催し、大きな反響を呼びました。NHKのクローズアップ現代で放映され、読売新聞の医療ルネッサンスなどにも取り上げられ、次第に社会問題になっていきます。厚生労働省にも陳情に行き、2001年から、5年間にわたる高次脳機能障害支援モデル事業が全国11か所で行われました。その間にこの障害を持つ人は全国に30万人くらい存在する、在宅のまま、支援の必要な人が、5万人存在すると厚生労働省は発表しましたが、今なお、その人たちに適切な支援が行き届いているとは言えません。

2000年に日本脳外傷友の会を結成し、全国の高次脳機能障害関連団体の連合組織会長となった私は、東奔西走して市民への啓発と支援を関係者に訴えています。

現在では、地方組織39団体が、参加している連合組織になっています。

若年の脳損傷者が多いことから、社会復帰、社会参加は最も重要なテーマで、就労、雇用問題は最重要課題です。

しかし、障害に対する職場の理解がなく、また本人、家族の障害受容にも課題があるため、転職を繰り返したり、失敗経験を繰り返してしまう例が多く、社会的引きこもりや、挫折により自殺などに追い込まれる例が後を絶ちません。

「新しいことが覚えられない」「コミュニケーションがうまくとれない」など、周囲の環境調整がうまく機能している場合いには、職場定着もかなり改善されて、社会に復帰できますので、まさに「合理的配慮」が切に望まれるのです。